

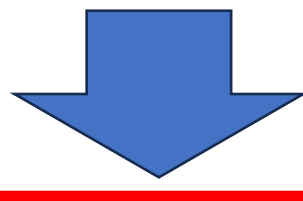
子どものことばの教育に関する研修の内容・構成の検討

— 学校教員・地域支援者を対象とする研修のアンケートから —

原瑞穂(東京学芸大学), 谷啓子(同), 河野俊之(横浜国立大学), 見世千賀子(東京学芸大学), 小西円(同), 工藤聖子(同), 市瀬智紀(宮城教育大学), 米本和弘(東京学芸大学), 齋藤ひろみ(同)

1 本発表の背景

- ・「特別の教育課程」により制度面は整備されつつある。
- ・研修機会は限られている。
- ・オンラインによる研修の展開, 多くが情報提供型



子どもの日本語教育担当者を対象にしたオンライン研修のアンケートの分析と、翌年実施した研修の成果から、オンライン研修のデザインについて検討

2 研修デザインの枠組み

外国人児童生徒等の教育を担う教員の資質能力(公益社団法人日本語教育学会2020)

資質能力	課題領域
【捉える力】 外国人児童生徒等の実態を言語能力のみならず、生育・学習歴、文化適応状況などから多面的に把握し、家族とその文化、社会的歴史的背景を理解する力	[子どもの実態の把握] [社会的背景の理解]
【育む力】 日本語指導に加え、教科学習に参加するための力を育成し、本人および周囲の児童生徒や関わる人々が、文化的多様性を尊重し、対等に、そして相互に関わりあうための異文化間能力の涵養を促す力	[日本語・教科の力の育成] [異文化間能力の涵養]
【つなぐ力】 外国人児童生徒等が学び・暮らす学校と地域の連携をはかり、異領域の専門家との協働等により、それぞれの場での学びをつなぎ合わせる環境をつくる力	[学校づくり] [地域づくり]
【変わる/変える力】 外国人児童生徒等教育に携わることを通じて教育における公正性を具現化し、文化的多様性に対して寛容な学校・地域づくりに貢献すること、その営みを通して教師(教員・支援員)として成長していく力	[多文化共生社会の実現] [教師としての成長]



図1 外国人児童生徒等教育を担う教員の資質・能力「豆の木モデル」

3-1 2023年度「外国人児童生徒等教育研修」(各2時間オンライン)

回/テーマ	目的	内容・構成
第1回 小学生年齢の子どもの多様性を捉え・育み・つなぐ 参加者 80名 新任者 28%	主に小学校での指導・支援に焦点をあてて、文化間移動する子どもとその背景の理解、日本語教室(国際教室)の運営の仕方、指導内容の構成や実施方法を理解すること	(1)講義 「日本社会の多文化化と小学生の課題」 (2)事例報告(小学校) ①「担当者の役割と日本語教室の運営」 ②「小学生の日本語指導(初期指導)」 (3)モデルプログラムの自己評価票記入 (4)情報交換会(任意参加)
第2回 中学生年齢の子どもの多様性を捉え・育み・つなぐ 参加者 93名 新任者 12%	文化間移動による異文化適応やアイデンティティの揺らぎ・変容、そして、認知的発達への影響を理解した上で、具体的な事例を基に、日本語や教科の指導・支援方法、また、学校全体で外国人児童生徒等の教育にどのように取り組むかについて学び、考えること	(1)講義 「文化間移動する中学生の心とことばの学び」 (2)事例報告(中学校) ①「文化間を移動する子どもの生活と心の支援」 ②「授業実践例」
第3回 就学前の子どもの支援・教育 参加者 82名 新任者 29%	就学前段階の多様な言語文化背景を持つ幼児やその家族を対象とした支援を学ぶこと、健やかな学び・成長の支援と小学校教育への接続について検討すること	(1)講義 「文化間移動する家族と就学前段階の子どもの教育課題」 (2)事例報告(就学前) ①「外国人の子どものための『大垣市プレスクールきらきら教室』の取り組み」 ②「外国につながる幼児・保護者と小学校を結ぶ地域活動」 (3)情報交換会

目標とする【資質・能力】

【捉える力】
成長過程にある子どもの実態を全人的に捉える

【育む力】
ことばの力を育む

【つなぐ力】
在籍級と日本語指導の場、地域と学校等の共時的環境を育成する

3-2 成果と課題

- ①満足度
講義および事例報告:約98~100%
自己評価票:約92% 情報交換会:約66%
- ②自由記述
・実践例から具体的指導方法を学び、自己の実践へ応用する意欲
・講義による理論的背景等の基礎知識の獲得や再認識
・資質能力向上に関する記述なし

●報告者の方のより具体的な支援方法を知ることができた。
●具体的にどう関わっているのかを聞いたことが良かった。絵本の紹介もしていたので、活用したい。
●実践的な内容で、明日から実践していきたいと思えることを教えていただいたことが大変参考になった。

成果:「使える」授業アイディア・技術の獲得

課題:自身の取り組みを振り返り、資質能力の相対化と向上への意識化(「価値観の相対化」三輪2018)



手立て:

- ①対象者範囲の特定化(初任者等経験の短い者3年目まで)
- ②各回の課題の焦点化と「目標とする資質・能力」の明示
- ③目標達成のためのタスク内容の選択と活動展開

4-1 2024年度(各2.5時間オンライン)

「多様性が活かせることばの教育—幼・小・中・高を結ぶことばの学び—」

回/テーマ	内容・構成
第1回 来日もない子どもの受入れと日本語指導の工夫~はじめてとはじめてが出会って~ 参加者88名 経験4年未満51%	(0)事前課題 講義動画視聴 (1)目標とする資質能力の確認 (2)講義 ①「来日後の子どもの受入れにおける配慮および日本語指導の工夫」 ②「幼小の学びの連続性について—子どもの学びの特性に着目して」 (3)事例報告 ①小学校低学年「はじめての日本語で楽しく話そう」 ②小学校中高学年「小学校中・高学年からの学習支援—日本語ゼロでも学べる教科と日本語」 (4)授業づくり(グループワーク) 三つの課題からグループで一つ選択 ①指示が伝わらない時の工夫 ②文型「~から(理由)」の指導の工夫 ③読み書きへの意欲を高める工夫
第2回 おしゃべりができる子どもへの学習参加支援~みんなの考え~わたしの考え~ 参加者107名 経験4年未満73%	(0)事前課題 講義動画視聴 (1)目標とする資質能力の確認 (2)講義「子どもが学習参加するための力を育む日本語指導の工夫」 (3)事例報告 ①小学校「子どもたちが考え、伝え合う場をつくる—読書カード活動等を例に」 ②中学校「JSL国語科「古典」単元の授業実践-比較分析する力を活かす」 (4)授業づくり(グループワーク) 小5理科「雲のようすと天気の変化」 在籍学級の授業に参加するために日本語教室で学ぶ授業案を作成
第3回 自己表現を支えることばを生きる環境づくり~社会とわたしを繋ぐ~ 参加者88名 経験4年未満54%	(0)事前課題 ①講義動画視聴 ②授業づくりの準備(情報整理) (1)目標とする資質能力の確認 (2)講義「アイデンティティから考える自己表現とことばの教育」 (3)事例報告 ①中学校「仲間との関係性の中で自分の生き方を見つめる授業デザイン」 ②小学校「こどもたちの持つことばときもちに光があたる工夫と取り組み」 (4)授業づくり(グループワーク) 各自「ことばで自己を表現する活動」の案を考え、グループで意見交換

目標とする【資質・能力】【課題領域】

第1回
【捉える力】
【子どもの実態の把握】
【育む力】
【日本語・教科の力の育成】

第2回
【育む力】
【日本語・教科の力の育成】

第3回
【育む力】
【日本語・教科の力の育成】
【異文化間能力の涵養】

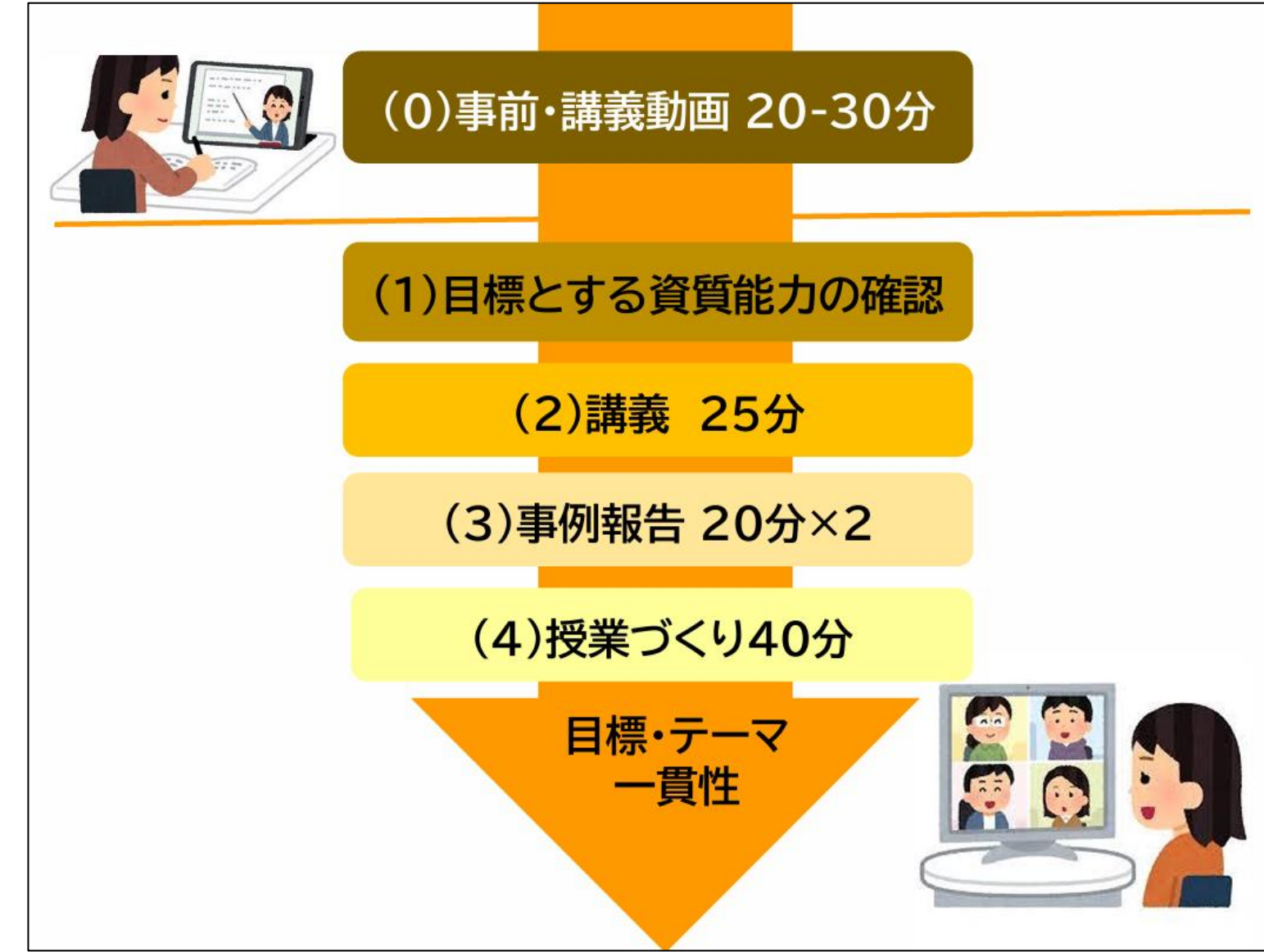


図2 研修の構成

4-2 成果と課題

- ①満足度
講義および事例報告:97~100% 授業づくり(GW):85~95%
- ②自由記述 (2023年の課題に関して)
自身の実践をふり振り返り、授業デザインの考え方、授業や子どもへの向き合い方への気づき

●週に数回しか来級しない子どもたちに何をどのように効率的に指導すべきかを考えるうちに、最も大切な経験を基に考え、思考し、そして日本語も身につけていくことを忘れかけていたことに気づかされた。
●講義で忘れがちになっていたことを再確認できた。事前の動画も用意してくださっていたのでしっかり学ぶことができた。
事例は具体的なお話に加え、先生方が大切になさっていることを教えていただき、ハツとさせられることもたくさんあった。子どもにとって意味のある活動を忘れないように授業を考えたい。
●初めて会った方とお互いの情報を共有や意見交換しながら、一緒にタスクを考えていくことでいろんなアイデアが出てきて勉強になった。指導している子どもに合わせてアレンジして使ってみようと思った。

【変わる/変える力】
【教師としての成長】

成果:講義、事例、グループワークで他者から情報を得たり、それを自身の実践に取り込んだりする経験を通し、普段の実践とその背後にある自身の考え方を意識化

6 今後の課題

- ・研修後のアンケートで目標とした資質・能力を自身でふり返る項目の検討
- ・経験の異なる者が共に学び合うオンライン研修のデザイン(授業づくりのグループワーク)

5 考察

①「おとなの学び」(三輪2018)

- ・おとなの学習者がもともと持っているものを大事にする
- ・「経験」尊重、学習資源として活用、講義との接続、省察(自分の価値観をふり振り返り、ことばにする)
- ・「ダブルループ学習」 ⇔ 「シングルループ学習」

自らの認知の枠組みを吟味し、省察し、それに変わる新しい考え方や行為の枠組みを取り入れながら問題の解決を図る

自分の内部にある認知の枠組みをそのままに、対象に理論や技法をあてはめて問題の解決を図る

②「越境学習」(石山2022)

- ・ホームとアウェイを「往還」(短期間に往き来)し、その刺激によって学習が生起する
- ・アウェイの環境条件「上下関係のなさ×異質性×抽象性」

③「実践を共有し実践から学ぶ」(齋藤他2012)

- ・実践に関する実施者の解釈と聞き手の解釈のずれや違いが新たな視点をもたらす、両者が自身の実践を意味付けし直すきっかけとなる。

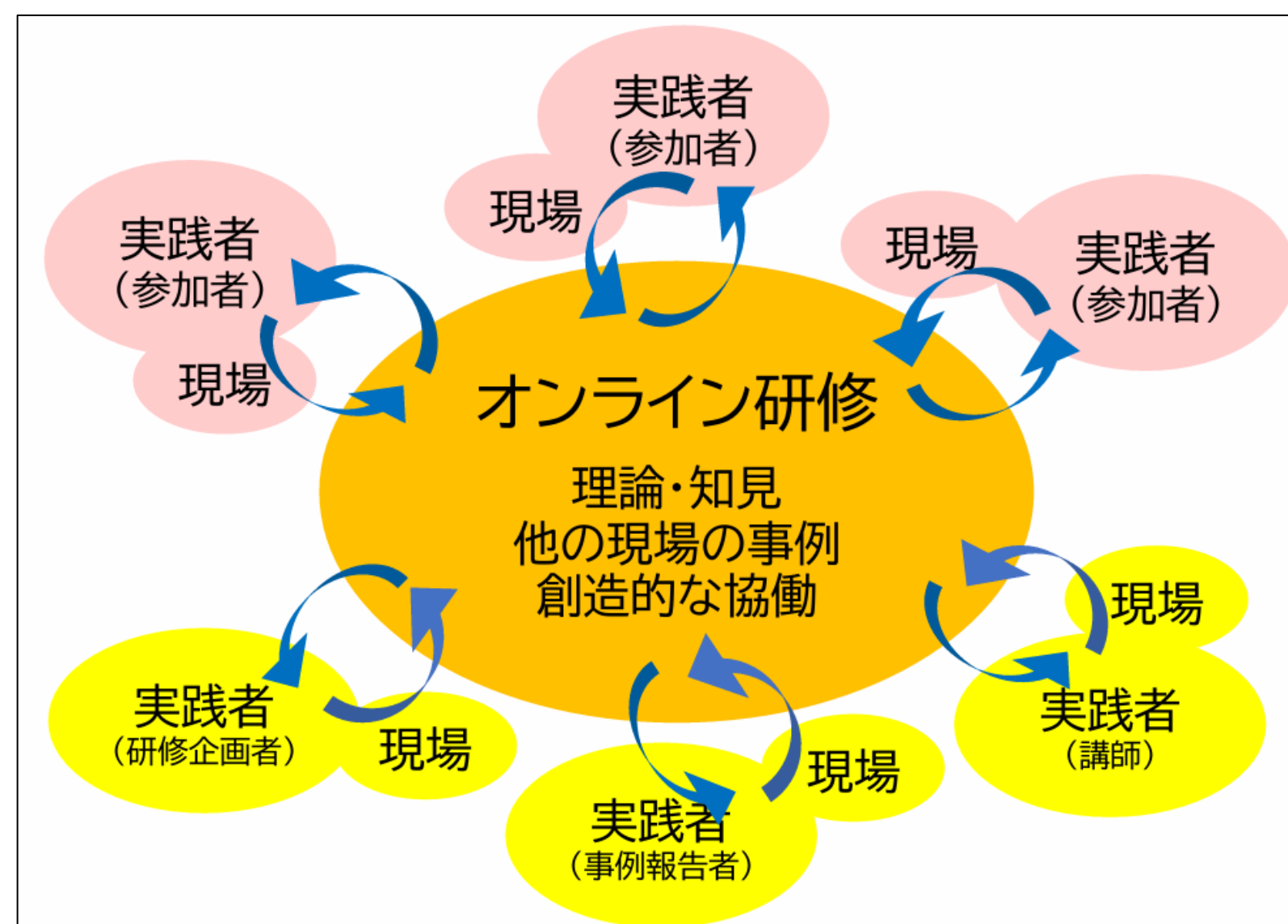


図3 オンライン研修の学びの場のイメージ(齋藤・金田・浜田2012, 図1を基に作成)

【参考文献】

- (1)石山恒貴(2022)「省察(リフレクション)で新たな気づきをもたらす越境学習の効果とは」『日本糖尿病教育・看護学会誌』vol.26, No.1, pp73-77
- (2)公益社団法人日本語教育学会(2020)『外国人児童生徒等教育を担う教員の養成・研修のための「モデルプログラム」のガイドブック』<https://mo-mo-pro.com/report>
- (3)齋藤ひろみ・金田智子・浜田麻里(2012)「実践を記す・実践を伝える・実践から学ぶ」『イマ×ココ』ココ出版, pp3-9
- (4)三輪建二(2018)『おとなの学びとは何か 学び合いの共生社会』鳳書房

- 【東京学芸大学先端教育人材育成推進機構外国人児童生徒教育推進ユニット 研修資料・報告】
(1)2023年度 <https://kodomonihongo.u-gakugei.ac.jp/project03/content2.html>
(2)2024年度 <https://kodomonihongo.u-gakugei.ac.jp/project03/content9.html>

